

るが、更に之れと關連して考ふ可きは舊唐書百九十八卷拂菻國の條下に

開元七年正月、其主（拂菻國主）遣吐火羅大首領、獻獅子・羚羊各二、不數月、又遣大德僧、來朝貢、
とあるもの之れなり。大慕闐の來れるは開元七年六月にして吐火羅の人なり、而して舊唐書には、同年正月拂菻國より吐火羅の大首領を遣はして朝貢し、其後數月ならずして又大德僧を遣はせりといふより此大德僧なるものも亦吐火羅の人にして、即ち冊府元龜等に見ゆる慕闐なるべしとは、早く Gaubil 氏の考がへたる所にして、其の後フィリップ (Phillip) 氏の如きは熱心に之を論證せんとし (China Review Vol. 7. p. p. 415.) たり、此の比定は他に之れを否むべき史料の存せざる限り、時と場所との條件よりすれば、ほゞ之を許容すべきものなること、多くの人の認むる所なるべく、只だ之に對する非難は正月に拂菻より遣はしたる使節が、吐火羅の人なりし之の故を以て、其後數月ならずして拂菻の貢使として至れる大德僧も、亦た之を吐火羅の大德僧と見得べきや否やとの一點にあるべし、而して此點に顧慮すべきに拘はらず、敢て此説を首張する人々の考を求むる時は、蓋し又た其間に大なる理由の存するものなるを知るべし、即ち此比定を根據として、當時クリスト教の東傳、殊に回紇にネストル教の入りしを證せんとするものにして、慕闐が當時拂菻國よりの使として遣はされたるものならば、彼は勿論其國教なるクリスト教の德僧ならざるべからず、従つて八世紀半頃の出來事として回紇碑文に新宗教の輸入を説きて「四僧入國、闡揚二祀。洞徹三際、慕闐徒衆、東西循環、往來教化、云々」と云へるものは、此國にクリスト教の傳播せられたるを記せるものなりと解かんとするものなり。此碑文の解釋に於て有名なるシュレーゲル (Schlegel) 氏の如きも、亦此考を抱ける人なりとす。されど由來條件の具備せざる比定は往々にして恐るべき誤解を生ずるもの